

イギリス・ラフバラ大学 スポーツエクササイズ健康科学部での学術交流報告
Academic Exchange at School of Sport, Exercise and Health Sciences,
Loughborough University

林田はるみ

Harumi Hayashida

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

スポーツ科学研究, 7, 74-75, 2010年, 受付日: 2010年7月14日, 受理日: 2010年7月14日

1. はじめに

早稲田大学グローバル COE プログラムの事業の一環として、箇所間協定を結んでいる英国レスター州にあるラフバラ大学との学術交流に参加する機会を得た。ラフバラ大学では施設見学、研究見学、学術交流セミナーにおける口頭発表等を経験したので以下に報告する。

2. 恵まれた大学施設・研究環境

ロンドンの北約 150 キロに位置するラフバラ大学は、イギリスでスポーツの名門と言われる大学とあってスポーツ施設が充実している。サッカーやラグビーなど種目ごとに専用のグラウンドがあり、体操やバドミントンなどのインドアスポーツも種目ごとに研究棟がある。これらの施設にはイギリスのナショナルチームが練習に来ており、学生はその様子を間近に見ることができるだけでなく、実際に研究対象に出来るという素晴らしい環境である。例えば動作解析で得られた結果がその場で選手にフィードバックされ、パフォーマンス向上に活かすことができるなど理想的なスポーツ科学研究がなされていると感じた。北京オリンピック・パラリンピックでは、56 名のラフバラ大学の学生や卒業生が出場し、8 個のメダルを得ている。折りしも 2012 年ロンドンオリンピックでは、日本オリンピックチームの事前調整場所として提携しており、今後受け入れ準備が始まるうとしているところである。

3. スポーツエクササイズ健康科学部

スポーツエクササイズ健康科学部の生理学研究棟の 2 階は吹き抜けの明るいフロアになっており、博士

課程の学生が研究活動を行っている。まさに研究室間の壁はなく、さまざまな国からの学生が実験以外の時間をそこで過ごしている(写真 1)。

早朝から行われた実験は、運動負荷が腹部脂肪組織に及ぼす影響を検討するものであった。学生を被験者として腹部の皮下脂肪を採取し、その後採血を行うところを見学した。日本では考えられないことであるが、イギリスでは研修を受ければ博士課程の学生でも採血することが可能である。研究でできることの範囲が日本と比較してかなり広いことを実感した。一方で動物実験は少ないようであった。人で研究ができるので、動物実験を行う必要性が少ないということだろうか。

博士課程と修士・学部の学生はチームで研究を行っている(写真 2)。優秀な学生が集まったチームは実験が進むことは言うまでもない。博士課程の学生は修士・学部の学生の研究のアドバイスをを行い、修士・学部の学生は被験者集めを行う。被験者集めに苦勞するのは日本もイギリスも変わらないが、無償で採血や脂肪生検をされるとあれば被験者が集まらないのも無理はないように思った。

4. 博士課程での研究活動

ラフバラ大学のスポーツエクササイズ健康科学部では国や企業からの研究助成金を得た教員が、博士課程の学生にテーマを与えて研究を行わせるというシステムをとっている。学生にとっては博士課程に進学するというよりも研究職を得るような感じに近い。もちろん私費での進学や論文博士の道もあるが、修士課程修了後に博士課程への進学のチャン

スを待っている学生もいる。教員は学生のそれまでの研究の様子を見ており、能力のある学生に博士課程進学の声の掛けるため、進学を望む学生は学部や修士課程のうちから気を抜けない。

一方、研究助成を受けるからには、実績を挙げる義務が生じてくる。このため博士課程の学生は3年間で論文5本というようなハードワークが課される。出席した博士課程の研究報告会では、それまでに行った研究内容が報告されていたが、個人差はあるものの一人当たり3~5本の論文を書いている。研究論文については英語を母国語としているだけに、日本人と比較して有利とはいえ、修士1年・博士3年という短い期間で、多くの研究成果を出しているのはすばらしいことであり、私も負けていられないと感じた。

5. おわりに

私自身の英語のコミュニケーション力に不安はあったものの、以前より海外で学び、研究するということに興味があり、またスポーツの名門のラフバラ大学を

見学できるということで、思いきって参加させていただいた。学术交流セミナーでの自分の研究内容に関する議論はもちろん、ラフバラ大学の皆様との英語による積極的な国際交流によって多くの知見と経験を得ることができた(写真 3,4)。ラフバラ大学の研究環境を目の当たりにして日本との違いに驚くことばかりであったが、実際に海外で学ぶ日本人大学院生の研究発表や日本人研究者の話を聴くなかで、自分も将来チャンスがあればぜひチャレンジしたいと思った。

最後に、早稲田大学グローバル COE プログラムリーダーの彼末一之先生、教育推進部門長の中村好男先生、この学术交流コーディネーターの宮下政司先生をはじめご尽力いただいた早稲田大学スポーツ科学学術院の先生方、お世話になったラフバラ大学スポーツエクササイズ健康科学部の先生、実験で忙しい中、案内して下さった博士課程の学生みなさんに深謝いたします。



写真 1 生理学研究棟 2 階の博士課程学生デスク



写真 2 運動負荷実験



写真 3 学术交流セミナーにて研究発表



写真 4 大学院生との交流